

所属・資格 ドイツ文学科・教授

申請者氏名 初見 基

研究課題		現代ドイツにおける「想起文化」形成の検証
報告の概要	研究目的 および 研究概要	本研究は、第二次大戦後ドイツ（統一以前は主として西ドイツ）において、ナチ時代の過去が公論においてどのように扱われ、いかなる変遷を経て、昨今のいわゆる「想起文化」が成立したかを、思想史・言説史的に検討することを目的としていた。これに向けて第一に、理論的側面を原理的に考察した。第二に、戦後ドイツの言説状況を政治思想的に考察し、その現在性を確認した。これを進めるにあたり、積極面のみならず、〈想起する共同体〉の〈他者〉を生み出さざるをえない否定面を、移民、「難民」問題とも係わらせて検討した。研究費は主として、このための資料の収集と整理に使われた。
	研究の結果	本研究は長期的視野のもとで遂行されていることもあり、単年度での大幅な進捗を見込まれるものではない。その前提のうえで、本年度にあつては、1950年代から60年代にかけての西ドイツにおける〈過去〉についての言説の転回において、テオドア・W・アドルノおよびフランクフルト社会研究所周辺の社会哲学者たちの所論、発言がどのような位置を占めていたかを検討し、その重要性を確認した。とりわけ戦後アドルノにおける特異な〈アンガジュマン〉の姿勢が西ドイツ社会に一定の影響力を有した点を重点的に掘り下げた。この成果は社会思想史学会年次大会において口頭で報告された。またこれと併行して、オーストリア社会、オーストリア文学における〈過去〉をめぐる言説を検討する一環として、トーマス・ベルンハルトが1964年に発表した小説「アムラス」を翻訳し、刊行した。
	研究の考察・反省	アドルノ検討については、1950年代から60年代にかけてのテキスト分析をなしたものの、彼の思想の全体像のなかでこれを位置づける作業はまだ端緒につくにとどまっている。 またベルンハルトに即しては、本年度は初期作品に関して検討結果を出しており、今後は2-3年をかけて中期短編および後期長篇小説に即して、同様なかたちで成果をあげることを予定している。 本年度は不測の事態のため研究に費やす時間を大幅に削減せざるをえなかったため、2020年度はこれを挽回するべく、本年度に収集された資料を中心により徹底的な分析・検討を進めるべく、態勢を整える。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所  研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>【研究発表】 第44回社会思想史学会大会 口頭発表：「啓蒙への回帰？ 西ドイツにおけるアドルノの一面」（セッション：「戦後思想再考」） 2019年10月26日/甲南大学</p> <p>【研究成果物】 1) 書評：須藤温子著『エリアス・カネッティ』 週刊読書人 第3295号 2019年6月28日 2) 翻訳：トーマス・ベルンハルト著（初見基訳）「アムラス」 トーマス・ベルンハルト『アムラス』5-117頁 2019年9月30日 河出書房新社</p>	